

草庵仏教

第184号
(発行日)
2005年10月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX
(0798) 63-4488
(発行人) 土井紀明
address---kousien2720kimyou@ze
us.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○ 真宗共学会 --- 毎月第1と
第3木曜日の午後7時より。
* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答⑮ 身体の色の問題

「先月号で弥陀の本願四十八願の中の第一願と第二願についてお話を伺いました。次の第三願はどういう内容ですか」

D 「実は四十八願全体が大いなる寛り(大涅槃)のお徳からであるものであり、別々のものではないといえます。ですから第三願も仏の寛りの智慧から現れたものなのです。『仏説無量寿経』の第三願は

たとい我、仏を得んに、国の中の人天、ことごとく真金色ならずんば、正覚を取らじ

(わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が正定聚に入り、必ずさとりを得ることがないようなら、わたしは決してさとりを開きません) となつています」

F 「法蔵菩薩はどうしてこういう誓いを起こされたのでしょうか」

D 「この願は、衆生が浄土に生まれたい、平等に金色に輝く身とならしたいという願いですが、金色はこの上なく尊い色のシンボルですから、真金色というのは仏身の色のこと、浄土

に生まれるものは全て等しく仏身となり、最高の尊い色の身にならしたいとの誓いです。ただしかし仏身そのものは色を超えていますので、金色という一つの色になると考える必要はないのであります」

F 「仏身は色や形を超えた存在であるのに、(ことごとく真金色ならしめたい)とまで誓われたのはなぜですか」

D 「それは世の中の衆生は身体の色によって苦しんでいることを悲痛された法蔵菩薩様が(浄土に生まれようと願いなさい、浄土に生まれると全て等しく金色に輝く仏身にならしめよう)と誓い、それによってわれら衆生が浄土に生まれたいという願いを起こさせようとされたのではないのでしょうか」

F 「こういう身体の色にまで法蔵菩薩が誓わなければならぬほど、この世は身体の色によって苦しんでいるといえるのですかね」

D 「そう思います」

F 「身体の色というのは肌の色ですが、それが苦しみの本になるのですか」

D 「苦しみの本というのではなくて、苦しみを引き起こす縁になつていくということです」

(色)を意味する語である。アーリア人のインド侵入当時、肌の色がそのまま支配者である彼らと被支配者である先住民との区別を示していた。この語に(身分)(階級)の意味が加わり、混血が進み肌の色が身分を示す標識でなくなつたあとにおいても、この語は依然として(身分)(階級)の意味に使われ続けたのである」

D 「無量寿経が成立したのはほぼ二〇〇〇年前のインドですが、インドはご存じのように(カースト)による厳しい差別があるといわれています。カーストとは(生まれを同じくする者の集団)ということで、インド社会においては主に四つの階級的な集団があり、上層からバラモン(司祭)階級、次にクシャトリア(武士)階級、その下にバイシャ(庶民)いわゆる農業・牧畜・商業)階級、その下にシュードラ(隷属民)階級があり、しかもこの主な四階級の下にチャンダーラという不可触民がいて、人間扱いされないような階級がありました。こういう階級がいつから始まったかというと紀元前一〇〇〇年ごろからといわれています。現在はこうした階級的な差別は法律上は撤廃されていますが、なお慣習的に強固に残つていて、そのため被差別民は多くの苦しみを受けています」

この語は依然として(身分)(階級)の意味に使われ続けたのである」

F 「そういう上下の階層が生まれたのはどうしてですか」

D 「それなんです。カーストという種性は実はインドでは(バルナ)とよばれています。それについて百科事典に

「色」を意味する語である。アーリア人のインド侵入当時、肌の色がそのまま支配者である彼らと被支配者である先住民との区別を示していた。この語に(身分)(階級)の意味が加わり、混血が進み肌の色が身分を示す標識でなくなつたあとにおいても、この語は依然として(身分)(階級)の意味に使われ続けたのである」

差別的な扱いを受け続けてきました。近代においてインドは民主主義国家になりましたが、二〇〇〇年も続いてきたこの規制は法律上はなくなっても、現実には昔ほどではないにしてもなお差別や抑圧は厳然として続いています」

F 「インドでは昔は人間の肌の色が差別される要素になり、そのために差別された人たちは随分悲しい目にあい、苦惱してきたのです」

D 「ええ、そういう差別の罪を知り、悲しみを知り、そういうあり方を批判されて釈尊は自らの僧伽（教団）を身分の差別のない領域にされました。釈尊は人間は生まれや血筋や肌の色によつて人間の価値や尊卑が決まるのではないことを教えておられます。仏のさとの智慧は、肌の色の違いによつて苦しんでいる衆生を哀れみ、衆生が平等な尊い身（黄金色）になることを本願とされるのです」

F 「肌の色の問題はインドだけの話ではなくて、今も世界の問題として存在しますね。ことにアメリカでの黒人問題はアメリカ社会における最大の問題であり続けています。それは白人と黒人の間だけではなくて黄色人種や混血の間にもある問題として、人類の底に深くよどんでいるように思います。それによつて多くの人が苦しみを受け、傲慢や蔑視、また怒りや怨みなど

として、人々の心の中に存在し続けているように感じます」

D 「少し余談になりますが、現在、アメリカでは、白人と黒人が共に融合し、同じ地域で共存しながら国家を形成していく方向ではなくて、お互いが棲み分けて住むという傾向が都市では近年顕著になっていると聞いています。このことはお互いの間が分断されていく方向に向かっているように感じます。もちろん黒人差別の問題は肌の色だけではありませんが、しかし肌の色という目に見える形や姿が人間を差別的に見る大きな縁になつていくことはいうまでもありません」

*

F 「広い意味で、身体の色や形や姿によつて、人は人を差別するということはずいぶんありますね。そこに人間世界の苦の一端があるのです」

D 「そうなんです。そこで法蔵菩薩は第三願に続いて第四願にたとひ我、仏を得んに、国の中人天、形色不同にして、好醜あらば正覚を取らじ

（わたしが仏になるとき、わたしの国の神々や人々の姿がまちまちで、美醜があるようなら、わたしは決してさとりをひらきません」

と誓われています。人の姿の美醜の問題です。美醜によつて私たちは人に対して差別したり、好いたり嫌ったりしているば

りか、自分自身の姿・形の良し悪しに思いわずらっています」

F 「人を学歴や資産の有無や社会的地位などで差別したり愛着したり嫌悪したりするだけではなく、きれいな人を好み、醜い人を嫌い、あるいは美形の人に嫉妬するなど、人の姿や形にとらわれて苦しんでいますね」

D 「人の行いの良し悪しで人を好んだり嫌ったりする以上に、人の美醜によつて近づいたり敬遠したり、差別したり、ねたんだり、そういうことがいかに人間世界を苦しいものになっているか。また自分の姿や形の美醜に優越感をもつたりコンプレックスをもつたりして煩わつています。法蔵菩薩はそういう色や姿や形に優劣や良し悪しをつけて、差別し、他を傷つけ、悩み苦しんでいるこの世の人々を哀れみ、そういう差別を超えた領域として浄土をお建てになり浄土へ迎えて、差別のない平等な功德をあたえようとされるのです」

F 「浄土に生まれて平等な仏の身にして下さるのです」

D 「ええそうお聞きしています。ただその功德はさとりの智慧を本質としています。色や姿や形への衆生の苦悩の内実は、多様な色や形や姿に価値的な差別をつけて、それに執着する迷い的心なのです。色に本来価値的な差別はありません。白色も黄色も黒色も色そのものに価値的な差別や上下はありません。価値

的な区別をして、愛憎するのは衆生の迷いの心なのであり、これこそが問題なのです。美醜をそこに見て愛憎するのは衆生の側の心であり、迷いの分別心であります」

F 「姿や形を見る人間の心にこそ、苦悩の根源があるのです」

D 「ええそうなのです。ですから浄土に生まれて覚りの智慧を完成するなら姿形にたいする差別の心は消滅し、色や姿を平等に見る眼を得、それによつて色や形にとらわれる苦しみがなくなるのでしよう。それゆえ第三願は、浄土に生まれて色や姿形を平等に見る智慧の眼を完成した身になることを真金色の身と仰せになり、第四願では姿・形が平等な仏身を得ることを誓われたとかがいます。それによつて衆生を安楽ならしめよう」とされるのでありましよう」

*

F 「浄土に生まれるとそういう功德があるのです。そのほかに第三願と第四願の意味は何かありますか」

D 「ええ。第三願や第四願によつて、私たちは身体の色による差別は、この世のあるべき姿ではなく、また姿形への美醜のこだわりはあるべき人のあり様ではないことを知らせていただきます。すなわち私たちの煩惱や罪の姿を映し出してくださいます。またこれらの願心はそれを信じる信心の智慧をなつて人の

心に働きかけて下さいます。信心の智慧の本質は仏陀の智慧であり、この世の人の信心の智慧となつて、その人のものの見方に影響を与えていきます」

F 「どのように信心は働いて下さるのですか」

D 「差別心で物や人を見ている私たちの物の見方を否定し、色や形には本来、価値的な差別はなく、美醜を超えていることを知らせ、平等な物の見方へと人を育てていって下さいます。差別だらけの眼しかない私に物や人を平等に見る眼へと次第に育てられていくのです。それが本願の働きであります。このように第三・第四願は浄土そのものの徳ばかりでなく、穢土の衆生に働いて下さるのです」

(了)

念佛寺報恩講

12月22日(木)

午後2時始

法話・大谷大学名誉教授

幡谷明先生

(どなたでも自由にお参り下さい)

歎異抄

後序第四講

いづれもいづれもくりごとにてそうらえども、かきつけそうろうなり。露命わずかに枯草の身にかかりてそうろうほどにこそ、あいともなわしめたまうひとびとの御不審をもうけたまわり、聖人のおおせのそうらいしおもむきをも、もうしきかせまいらせそうらえども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてそうらわんずらめと、なげき存じそうらいて、かくのごとくの義ども、おおせられあいそうろうひとびとにも、いいまよわされなんどせらるることのそうらわんときは、故聖人の御ころにあいかないて御もちいそうろう御聖教どもを、よくよく御らんそうろうべし。おおよそ聖教には、**眞実権**ともにあいまじわりそうろうなり。権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ、聖人の御本意にてそうらえ。かまえてかまえて聖教をみみだらせたまうまじくそうろう。大切の証文ども、少々ぬきいでまいらせそうろうて、目やすにして、この書にそえまいらせてそうろうなり。

(「歎異抄後序より」)

現代語訳

(どれもみな同じことの繰り返しではあります。どこに書きつけておきました。枯れ草のように老い衰えたこの身に、露のようにはかない命がまだわずかに残っているうちは、念仏の道を歩まれる人々の疑問もうかがい、親鸞聖人が仰せになつた教えのこともお話ししてお聞かせ

いたしますが、わたしが命を終えた後は、さぞかし多くの誤った考えが入り乱れることになるのではないかと、今から嘆かわしく思われてなりません。ここに述べたような誤った考えをいいあっておられる人々の言葉に惑わされそうになつたときには、今は亡き親鸞聖人がそのおころになつて用いられたお聖教をよくよくご覧になるのがよいでしょう。聖教というものには、眞実の教えと方便の教えとがまざりあつていゝのです。方便の教えは捨てて用いず、眞実の教えをいただくことこそが、親鸞聖人のおころなのです。くれぐれも注意して、決して聖教を読み誤ることがあつてはなりません。そこで、大切な証拠の文となる親鸞聖人のお言葉を、少しではありますが抜き出して、箇条書きにしてこの書に添えさせていただきます(いたただいたのです)

*

親鸞聖人亡き後、ほどなく聖人の仰せと異なることを仰せと云つて、聖人の教に混乱が生まれ出したのを面授の弟子であつた唯円様が嘆き、なんとか聖人のご本意を自分の生きていゝ間に表しておきたいという願いで書かれたのが『歎異抄』であるといえましよう。

このように聖人がおかくれになつてほどなくしてすら聖人のご信心と異なる説を聖人の教であると説く人たちが出始めたのですから、聖人からはるかへだつた今日、聖人のご信心と異なる説が「浄土眞宗」の名において多く現れるのは当然といえましよう。

こういう状況の中で、どうしたら親鸞聖人の眞実信心の思し召しを正しくいただくことができるかといえば、それはなんといいつても聖人の書かれたお聖教と

(故聖人の御ころにあいかないて御もちいそうろう御聖教どもを、よくよく御らんそうろうべし)と云わざるを得ません。そこでまずは眞宗のお聖教を正確に了解することが大切になるのであります。

ところが「おおよそ聖教には、**眞実権**ともにあいまじわりそうろうなり」で、お聖教の文章には眞実そのものが説かれた箇所(眞実)とその眞実にまで導くいわば教育的手段として説かれた部分(権仮)とがあり、そこをよく心得て読まねばならないと唯円様は注意し、「権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ、聖人の御本意にてそうらえ」と仰せられて、眞実信心をいただくには権仮の部分は権仮として見きわめ、眞実を説かれたところをこそ大事に頂かねばならないといわれるのです。

*

権仮方便の教は眞宗では十九願・二十願の教説とされています。それは、自力の執心に惑わされて直ぐには眞実信心のお心を頂きかねる私たちを、眞実信心にまで導くために仮に説かれた教説です。

権仮方便の教説が間違つた教であるといふのは勿論ありません。それは教育的な手段としては大事な教説です。しかし、権仮の説が方便の説であることを了解して説かれるなら結構ですが、それが聖人の眞実信心の思し召しであるかのように説く者もそう思いこみ、他の人々にそのように説かれてくると、自他ともに仮の教に止まつてしまふとか、あるいは何が本当なのかいつまでもわからず惑うてしまふことになりかねません。それを唯円様は嘆き、「かまえてかまえて聖教をみみだらせたまうまじくそう

ろう」と警告し、そういうことがないよ(うにと)「大切の証文ども、少々ぬきいでまいらせそうろうて、目やすにして、この書にそえ」られたのが、この歎異抄なのであります。ここで「大切の証文」といふのは何か。それについてはいゝんな説がありますが、歎異抄の第一章から第十章までというのが穩当であろうと思ひます。

*

では十九願の教説とはどのようなものでしょうか。それはいわば「現在の私がいまのままではダメだから少しでもどうかかつてこそ」助かる、助けていただけ、あるいは助かるうとする立場です。それを勧める側から云えば、今この私に対して、「自分が因縁によつて生かされていゝことに気がつきなさい」とか「今すでに生きていゝことに目覚めなさい」とか「我執の深い自分であつたと己の罪悪性を自覚しなさい」とか「思い通りにならぬ自らの現実を引き受けよ」とか「疑う心を晴らしなさい」とか「信心者になりなさい」とか、要するに「今のあなたではダメで、こうなつてこそ助かる」といわれる話です。そういう話で落ちつくことのできる人もありましようが、底下の凡夫はそこからなのお脱落してしまふ外ないのです。

チリばかりも自分で自分をどうすることも出来ない人間、今その人間が第十八願の目当ての人間とされるのです。「救われ難き人間」への救済なるがゆに、第十八願は万人が平等に助かる法なのであります。

なお二〇願の教説は、念仏を申すことによつて助かるうとする立場です。

(了)

【初めてのインド2】

エローラとアジャンターの窟院を後にして、次にジャイナ教を信奉していた王の城跡に登った。ここは他からの攻撃によって破壊されたままのような遺跡で、この王はジャイナ教の教である不殺生戒を厳格に守り、武器を持って戦うことなく降伏した。その遺跡にジャイナ教祖であるマハーヴィーラの像がこわれかけたまま残っていた。他国から自国に攻め込まれた時どうするかは永遠の課題であるが、この王は戦うことよりも戦わずして平和的に降伏することを選んだのだが、考えさせられる場所であった。そうこうして近くの駅から汽車に乗り、マドラスに向かいハイデラバードで途中下車。ハイデラバードはイスラム教の王（マハラジャ）が支配したところで、マハラジャの宮殿を見に行った。博物館のようになっており、そこに陳列されている宝石、絵画、陶器、ジュエリーなどは豪華絢爛たるものでその財力に圧倒された。ところが汽車に乗るべくハイデラバードの駅のホームにいて、ホームで売っているパンを買って一口したとき「ガリッ」と石をかんだのである。思わず口からパンをはき出した。そうしたら近くにいた浮浪者の子供が、はき出したそのパン片をくると小さい手を差し出してきたので一瞬胸が詰まった。人の口から出したものさえ食べなければならぬ悲惨さというか極貧の現実というか、さきほど見たマハラジャの生活ぶりとは余りにも格差があり、これがインドの一面なのかと心が痛んだのである。さて、ボンベイ（ムンバイ）からマドラスまで寝台車で二泊したが、寝台車といっても、クーラーもなく極めて暑い車中で、寝るところは三段に分かれ、それも下は木の板であるから、身体の節々が痛い。車中の食事は定食の注文を係の者が取り回ってくる。そして菜食かそうでないをたずねられるのである。汽車の定食はレストランのと比べはなはだ辛い。水で流すようにして食

べるのだが、水と云ってももちろん水道水である。

った。

（続く）

こういう物を三度三度食べるのだから、一行の者に腹具合が悪くなって下痢をする人が多くなった。車内ではヒンズー語の初級教科書や、それに唐辛子まで売りに来る。よくもこんな辛い物をとと思うが、これが結構乗客のおやつになっている。そんな中でおいしいのはインドテイで、ミルクの中に紅茶と砂糖を入れ、独特の香料を加えたものである。ただカップが土器の素焼きで、底に砂がついていて、きれい好きの日本人がこれで飲むには勇気がある。駅に停まるたびに3分近くも汽車は動かないが、その間、さまざまな物売りや物乞いが次々と座席までやってくる。車掌は当たり前のごとくで止めもしない。インドでは貧しい人々は物乞いをするのは当然の行為あるいは権利としてお互いが了解している。この物乞いというのが、片足が無いとか、目が見えないとか、象皮病といって足が象の足のようにふくらんだ人とか、皮膚病のひどい人とかで、しかも子供も多い。見るだけで悲惨である。これが停まる駅ごとに同じような物乞いが次々と車中を回ってくるので、いささかこちらの神経も参ってしまう。暑さと汗とほこりと疲労の二泊の列車内生活が終わって、インド南東海岸の大都市マドラスに着いた。その日はラーマクリシュナ教団の宿舎に泊まった。ごく簡素なベッドに毛布一枚をお借りして寝る。次の日はどういう手配になっていたのか知らないが、お金持ちの家に行は三々五々分かれて泊めていた。私は秋野不矩先生のお弟子の一人と一緒にある家でお世話になった。大きくて美しい洋館建ての家で、召使いが十人ほどいた。門衛、運転手、食事係、洗濯係、掃除係などである。奥さんはすることがないのでローケツ染めの趣味に力を入れていた。主人は貿易商だった。我々は美しい部屋に通されると、早速シャワーを浴び、旅の汚れを丹念に洗い落とした。二階の窓から外を見ると、この家の周りには貧しい人たちの粗末な小屋が立ち並んでいる。これもインドの現実であ